

# 「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫

◆◆◆ No.0874 ◆◆◆

26/01/14

## 【「年間変動 20 円超」は昨年途切れる、今年も小変動!?】

昨年 1 月に報じた「2025 年の年間見通し」は、ザックリ「ドル安方向」。年明け 1 月に年間高値 158.88 円を記録し、4 月に 140 円割れまで下落したことで一応「的中した」と言ってよいだろう。しかし、そのうち年末に掛けてはVの字型の回復。ほぼ全戻しするとは、さすがに想定していなかった。そうした意味では、一抹の悔しさもないではない。

さて、そうした状況を踏まえつつ、今回の当レターでは新春恒例である「年間変動率」を参考にしたドル/円相場の今年一年の見通しについて報じてみたい。期待していた 4 年連続の「年間変動 20 円超」が、昨年未達(18.99 円=139.89-158.88 円)に終わったことを、どう考えるかによって見通しがだいぶ大きく変化する気がしている。

### ◎予想レンジは「144-165 円」、「ややドル弱気相場」と予想

当レターでは過去に幾度となくレポートしている「年間変動率」だが、改めて最初に簡単な説明を試みたい。過去の相場変動をデータ化したもので、ドル/円の平均変動幅は約 18.5 円、同率もかなり近い数字の 18.2%程度となる。

一方、今年の為替市場の寄り付き価格は、筆者が参考になっているデータで 156.70 円。これを基準価格とし、今年も平均で先に挙げた 18.5 円、あるいは 18.2%の価格変動が予想されることになるわけだ。

そして、今年のオープンレート 156.70 円に後者のデータ平均変動率である 18.2%を単純に掛け合わせてみると、仮に一年を通して一本調子のドル高が進行した場合の高値メドはなんと 180 円オーバー。逆に一本調子にドル安が進んだとすれば安値は 130 円割れとなる。なかなかイメージしにくいドル高もしくはドル安レベルへの進行も、飽くまで理論上は否定できないと言えよう。

ー ー 上記したものは通常のオーソドックスな分析になるが、ここからが過去にもレポートしているオリジナルな「斎藤流」の年間変動率だ。いま一步踏み込んでさらに詳細な見通しを考えてみたい。

過去の変動率のデータを、最初に(1)「ドル強気相場」と(2)「ドル最強相場」、(3)「ドル弱気相場」と(4)「ドル最弱相場」、(5)「中立相場」ー ー という 5 段階に分類してみる。紙幅の関係もあり、上記 5 例の算出方法や詳細な分類については省くけれども、それからすると(1)の「ドル強気相場」の年は年初寄り付きを基準に平均でドル高方向におよそ 13%、ドル安方向に同じく 5%ほど動くことが判っている。同様に以下で、(2)から(5)について算出した過去の平均変動幅をもとに、今年のドル/円相場のドル高値と安値を予想してみた。以下がそれになる。(基準レートは 156.70 円を使用)

- (1):「ドル強気相場」;ドル高方向に 13%、ドル安方向に 5% ー ー ドル高値 177.07 円、ドル安値 148.87 円
- (2):「ドル最強相場」;ドル高方向に 17%、ドル安方向に 2% ー ー ドル高値 183.34 円、ドル安値 153.57 円
- (3):「ドル弱気相場」;ドル高方向に 6%、ドル安方向に 12% ー ー ドル高値 166.10 円、ドル安値 137.90 円
- (4):「ドル最弱相場」;ドル高方向に 3%、ドル安方向に 16% ー ー ドル高値 161.40 円、ドル安値 131.63 円
- (5):「ドル中立相場」;ドル高方向に 9%、ドル安方向に 9% ー ー ドル高値 170.80 円、ドル安値 142.60 円

上記のように、飽くまで過去の「年間変動率」を参考にすると、今年一年間でドル/円相場は「30円近い」変動をたどっても決して不思議はないようだ。

そして、ドル高 or ドル安のどちらか一方に偏って動いた場合には、先でも指摘した「180 円台」、あるいは「130 円台」といったレベルをつける可能性もないでない。決して絵空事ではなく現実のものとして、頭の片隅には留めておいて損はない気がしている。

とは言え、これは前段でも取り上げた話になるが、過去 3 年間続いてきた「年間変動 20 円超」が、昨年未達に終わっただけでなく、また「年間変動率」はたったの 12.1%と 2020 年以來の低水準へと落ち込んでい

る。後者はもちろん、前者も完全に想定外の出来事だった。いずれにしても、これから考えられることは、ドル/円の「大相場確変期」が昨 2025 年に終了、もしくは終了を迎えつつある気もしないではない。つまり、残念ながら、年間を通してあまり大きな変動を期待してはいけないサイクルへと再び入った、あるいは入りつつある可能性もありそうだ。

